

森林管理士資格養成講座【論述試験】模範解答

監修：森林管理士資格認定委員会

【2011年度】

H . S さん (大分県)：森林管理士の役割

森林管理士の果たすべき役割として、今回の森林管理士養成講座で学んだことは、3つあります。

まず、ひとつ目は、森林経営計画を立てること。これは、来年度(2012年度)から森林法改正により、森林経営計画を立てないと補助金がもらえない。森林所有者は森林組合に経営計画を立ててもらうが、森林組合でも限界があるため、森林管理士を持っている我々が、森林組合に替わり計画を立てる。

現在は計画を立てたからと言って、貨幣価値に換算できないが、そのうち、1haあたり 円の単価でも出れば、計画を立てて森林所有者にも喜ばれ、計画を立てた側も喜ぶシステムができるのではないかと思う。

二つ目は、カ - ボンオフセットの数値の測定であったり、効果の検証である。現在の日本では、カ - ボンオフセットに関する法律はないが、近年地球温暖化が叫ばれている中、CO₂を排出する企業は、やはりCO₂を削減する方法を採用したり、排出を削減出来なかったCO₂を吸収してくれる森林で補うことに興味や関心を持つべきだと思う。

森林管理士としては、この森林は適切に管理されて、CO₂をどの位吸収してくれるかを計測したり、維持されているかを検証して、目に見える形で数値化して、森林の持つCO₂吸収力をPRする必要がある。

三つ目は、森林セラピ - など自然体験を通して、森林の大切さ、森林の良さを多くの人に教えてあげること。これは、当社でも7年ぐらい前から、社有林に小学生から大人まで呼んで体験学習を持っているが、やはり参加者からは大変好評で今後も活動を継続していきたい。アレンジを加えた学習も九州に帰った後も、考えてやって見たい。

M . M さん (兵庫県)：2020年に木材自給率50%以上にするために

2020年までにわが国の木材自給率を50%以上にするためには、まず生産コストを下げなければならない。そのためには、高性能林業機械の導入を進める必要がある、そのための優遇措置が必要である。また、林業機械が通行できる作業道の整備が不可欠です。日本は、単位面積当たりの林道はドイツの7分の1しかないことを考えても、林道の整備が喫緊の課題です。また、林業人口の増加と高齢化の防止しなければなりません。

そのためには、若い人たちに林業の魅力を訴える必要がある。林業は、そもそも先進国の産業であり、決してカッコの悪い職業ではないことを、もっとアピールします。林野庁は余りにも宣伝していないように思われる。高性能機械を扱う若者の姿を見せるだけでも宣伝になる。

先般の大震災の影響もあり、学校等公共施設は、丈夫な鉄筋コンクリートでないといけないという機運が高まっているが、床など可能な限り木製にするべきである。

最も大事なことは、国民一人ひとりの森林・林業に対する意識の向上かも知れません。学校教育において、もっと国の方針を子供たちにも知らせるべきだと思う。森林は日本が誇る貴重な資源であり、先人たちの努力によって今日の森林がある。これを生かしていくのが我々世代の責務です。

私は、林業に計り知れない将来性があると思い、今回にセミナ - に参加しました。

T . E さん（栃木県）： 間伐の目的について

私は、1950年、旧葛生町の山奥で5代続く専業林家の長男として生を受け、成人したら家業の林業を継ぐことしか考えはありませんでした。1970年、父の他界により専門学校を中退し、家業の林業の世界に足を踏み込みました。

当時は、拡大造林と高度経済成長期で材木も高い値段で売れ、伐採と植林・下刈と一生懸命森林の手入れをしていたので、現在のように間伐手遅れ林分という事が全く考えにありませんでした。木材価格が下がるに連れ、徐々に森林から遠ざかって行き、ついには森に足を運ぶことさえしなくなりました。多分、その頃から森林が手入れ不足になって荒れていると報道されるようになったと思う。

森の大切さを私に教えてくれ、再び私を山に連れ戻してくれたのは、東京から佐野にお嫁に来た女性の方たちでした。彼女たちは、「佐野こども劇場」と言うボランティア団体を作って、子供達に、「森の遊び方や森の大切さを子供達に教えようとしていました」。

その当時、私は地域の村おこしで木工品を作っておりましたので、私に子供達に木工品作りを教えて下さいと頼まれて、木工品作りを教えました。その次ぎに彼女達に頼まれたのが、森林の間伐体験でした。その体験の時に、子供達に森林の大切さや植林をした木は間伐をしなければ立派な木に育たないことを教えなければなりませんでした。

しかし、それは自分が育ててきた森に再び向き合う時が来たのです。森林の間伐は若い時から仕事としてやってきた事です。それからは、毎年、計画的に間伐をし、2回、3回と間伐を繰り返した山になっている。手入れをした山は必ず私に利益をもたらしてくれます。森林の健全化とは、自ら山を直視し、愛情をかけてやる事だと思う。2残1伐の列状間伐も試してみましたが、何の問題もなく成長し、次の間伐も実施しました。

K . N さん（東京都）： 山間地域振興のために何をなすべきか

現在、住宅市場における一戸建・集合住宅の空室物件は、全国に700万件と言われている。東京では、高度経済成長期に雨後の竹の子の如く林立した団地アパートの空洞化が進み、地方における市町村の人口減少や限界集落化現象については今更述べるまでもない。

その様な中で、いわゆる脱都会・地方志向のIターン希望者が、絶対数として少ないながら、いる事も事実である。彼らを受け入れる為の空き物件ならば、趣深い木造住宅等事欠かない。しかし、その実現を妨げる障壁として、雇用の問題がそこに横たわっている。

今まで、地方は地域振興の王道として、都市部に本社を持つ大企業の工場誘致等に躍りになってきた。しかし、日本人全体の人件費の高騰等により、企業にとって、地方への製造機能移転はうま味が無くなってきたと言える。

この空いたパツを埋め得る産業の一つに、林業を挙げる事が出来るだろう。戦後の植林から50年を経て育った森林の蓄積量の豊富さを好機と捉え、森林資源をとりまく産業集積を構築する必要がある。

造林、素材生産、加工、住宅メカや家具メカ、燃料としての販売まで、森林産業の川上から川下までは実に多様な産業集積を構築する潜在性を秘めている。また、そこには林業機械の製造とメンテナンスと言った機械工業も加えて置きたい。

こうした産業集積は、多くの地方がその地理的優位性を発揮しうる。重くてかさばる木材を運ぶ輸送距離の短さは、大きな優位をその地域にもたらす。

加えて、木材産業としての森林活用事業と、体験型観光事業等をミックスすることで雇用を創出し、Iターン・Uターン希望者の増加を図る。彼らを迎え入れる箱、つまり空き物件は全国にひしめいている。

森林を中心にした雇用機会の増大が、建築分野における再利用の好循環を生むのである。それが地域振興のカギだと私は信じている。

H . I さん (栃木県) : 森林・木材資源利用のあり方

森林・木材資源の利用方法として、今回の講習会では5つの方法を学びました。昔は建築資材として日本国中で使用され、計画を超える伐採が行われた時期もあつたり、外材が輸入されるようになると、より安価な外材にとって替われ、森林の管理が行き届かなくなり、荒廃する森林が多くなつたりした過去があり、現在に至ることを学びました。

5つの利用方法であるが、まずはエネルギーとしての木材利用が考えられる。今年(2011)3月11日の大震災後、エネルギー資源に対する考え方が大きく変わりました。主に発電に対するものであるが、その中で私たちが取り組める事は、マキあるいは炭としての木材利用である。除伐で発生した木材を利用できれば、廃材が森林の中に残される事がなくなり、再生不可能な地下資源の使用量を減らすことにも繋がります。

2つ目、土木建築資材としての利用も面白いと思う。現在の建築基準法などに照らし合わせると、強度の問題があるかも知れませんが、昔は橋でも、梯子(はしご)でも木で作っていたのであるから、まずは可能な場所や用途によって、橋や電柱などを見直す事も大切であると思う。

もちろん、住宅などの建築資材としても、今後は見直して利用されるべきだと思う。今後の地球環境を考え、持続可能な保全を考えつつ、利用方法をいろいろと検討すべきだと思う。

[2010年度]

K . C さん (秋田県) : 国・公・私有林に共通する問題点

現場サイドから見ると労働力不足や管理を担当していく技術者不足、更にそこから生産される木材価格の安さと言える。施業面では拡大造林で植えられた林の林齢的に間伐期を迎えているのに、手入れを目的とした保育間伐はできても、収入を目的とした利用間伐はし難い。行っていない森林が多く残っている。もう一つ大事な事は、森林は公益的役割が大きいため所有形態の違いにかかわらず、山村の地域住民や、都市住民との関係も水資源供給という意味でも深いと考えられる。

1) 国有林は国立公園などに指定されている場合などは広く接することができる場合もあるが、森林経営を目的としている国有林は一般に入ることが困難である。大正時代から秋田で秋田スギ(現在天然秋田杉という)が大量に伐採利用されたが、この殆どは国有林材であり、現在は一部にしか存在していない。国有林野事業の無計画さの象徴とも言える。

2) 公有林は県や市町村、森林整備組合、市町村などの管理する財産区有林であるが、森林整備組合などが分収管理する森林経営の有り方は、各々頭の痛い問題であると思う。更に今言われている持続可能な森林経営をしていく時に、市町村担当者に専門的技術者が不在であるということが大変な問題である。

3) 私が所属している森林組合は、市の出資が40%を超えている組織なので、当組合から働きかけ、市の合理化とアウトソーシングというか、長期委託契約の上で森林組合が造林管理者となれないかを、実務者会議を提案している。先日一回目が開催された。

私有林は所有者の高齢化、不在地主化など問題だらけである。私どもの地域は冬の多雪地帯であり、路網整備も大事であるが、集約化提案型施業をしていく上で、冬期の伐出作業を現在の機械化と組み合わせしていく事も、当面の課題である。百年後の山の姿を想定しながら、今やるべき事を考えて行きたい。

K . C さん (秋田県) : 拡大造林の課題

私が 1972 年に大学を卒業し、北海道の林業関係の会社に入った頃、まさに、緑化ブームで山は拡大造林一色でした。戦前・戦中に禿げ山と化した日本の山を植林してきた先輩諸氏の苦労は大変だったと思う。更に、高度経済成長と重なり、保険に入るより山に木を植えるのが当たり前の時代であったと思う。

オイルショック以後、1980 年の素材価格はピークを迎え、どんどん安くなって行ったが、下刈り、除伐、つる切り、枝打などは適時に行われ、それなりに育林はされてきたと思う。ただ、間伐期を迎える頃から不景気、材価の低迷が続き、政府(林野)方針の転換が行われぬまま、手遅れ気味になってきた森林が存在する事態となっている。拡大造林は当時の日本の山を再生した原動力であったと思う。

ただし、拡大造林が分収林(官行造林など)として行われた伐採跡地が返地となった山が、その後放置され、大面積が未植栽地となっているの見るのは私達の廻りだけでしょうか。全国的にあまり多くないかも知れません。

しかし、一方では、生物多様性が声高らかに言われるときに、森林の植林形態、経営形態、労働形態などの多様性が無視され、狭義の意味での森林整備が行われている事には疑問を感じます。拡大造林、再造林、天然林育成、山の施業や山林経営のあり方は、一元的見方では言えないものと考ええる。

現在、老齢化した森林や間伐手遅れ林分の話が出来るのは、昔、優良母樹から種子を採り、苗木を育て、丁寧に植林し、ていねいに手入れをして来たから残っている森林である。これは拡大造林しなければ話することも出来ないことである。

日本人はこの機会に森林思想に基づく自分たちのルーツと哲学を論じ合うべきであり、政治的行政的理論でのみ、森林・林業をみていくのは大変片手落ちでないか考える。父から教えられた言葉に、「木は囲まれれば困るという字になる。間伐しろ」

T . S さん (秋田県) : 国・公・私有林の課題

戦後奨励された拡大造林により、8～9 齢級と偏った齢級配置となっている。このために、現在、大量の間伐を行っていかねばならない。この間伐を行うため、路網の整備、高性能林業機械の整備が急務となっている。また、偏った齢級配置のために、将来皆伐期を迎えた時、現在の立木価格のままでは、再造林が行われることも無く、放置された山が大面積となり、土砂災害等の入災が増すのではない。

所有形態別の課題・改革方向

1) 私有林では、農山村の高齢化、また経営者の関心の無さ、境界の不明、立木価格の下落、手入れ不足による林分の悪化など、様々な問題を抱えている。今後、森林組合は、境界の明確化、施業の集約化に積極的に取り組み、森林組合に任せられた良かったと言われる様に頑張ることが大切である。

2) 公有林では、県有林、市有林、財産区を担当する職員が 2～3 年程で変わるため、現場等の場所すら分らないため、森林組合におんぶに抱っこ状態となっている。このようなことを続けていってしまうので、市と森林組合で管理委託のような契約を取り交わし、森林組合へ山の管理、現状調査を任せられた方が、市としても様々な削減に繋がるとなると思う。

3) 国有林では、営林署から森林管理署へ変わった時点で、作業員を解雇するなど、作業等はすべて事業体へ請負いさせている状況のようである。私の住んでいる地域には国有林が 5%しかないため、国有林の仕事をしたことはないが、私有林・公有林と隣接している箇所もあるので、一体となって施業が出来ることをよう願っている。これも集約化の一つなる。

M . T さん (岡山県) : 拡大造林政策後の課題

戦後荒廃した日本を復興する上で、木材は大変重要な役割を果たした。住宅やその復興資材として多くの木が伐られた。その伐採跡地に対して植林がなされたが、経済の復興と同時にパルプの需要増加により広葉樹も伐採されると、その跡地に対して植林が始まった。これが拡大造林の始まりである。拡大造林は、地域経済には雇用の増大を生む等、産業が十分に発達していない時代には、格好の働く場所となった。

しかし、その時には、スギ・ヒノキ・カラマツ等単一樹種の植栽が多くを占め、現在の荒廃した人工林を作ってしまう要因ともなった。やがて、経済の発展と共に燃料革命により、薪炭材を生産していた里山林はやがて放置されたままの山林となってしまう。

人工林も、やがて木材不足により輸入された外材により、手入れの遅れた人工林を生み出すことになる。現時点でも、その人工林は多くが放置された状態で残されており、緊急手入れを行う必要がある。

過去の拡大造林は、将来にわたる計画により植林された造林地ではないため、条件の非常に厳しい奥山への造林等もあり、手遅れ林分として残っている要因となっている。

近年になって、成熟してきた間伐だけでなく、利用間伐を実施しているが、伐り捨て間伐だけでなく、利用間伐を実施していくには多くの課題を抱えた造林地である。適切な人工林にして行くには、路網整備は必須条件である。材価の安い現在では、如何に低コストで施業を実施するかを課題を抱えている。

日本林業の再生する道は、拡大造林によって造成された人工林の育成を実施すること、すなわち、今迄蓄積された材積を如何に利用していくかである。

T . K さん (福岡県) : 森林管理として取り組む課題

もっと森と森が果たす役割を理解し、それを広げていくことに大きな役割を持つと考える。二酸化炭素の吸収を測定したり、子供たちに環境学習を行い、森の良さ、環境変化がもたらす恐さ等、今後取り組むべきことを学習を通して、知り、伝えることが、これから最も大事なことだと思う。

森に入り、森と生き物と触れ合い、森のことを知り、体感する。森林は、癒しの空間であり、都市化が進み、そこで働く人、暮らす人に森林を通して、安らげる時間、場所も日本人には必要な時代となってきている。森が与えてくれるセラピー - やフィトンチッドによる効果を感じて、生活の中で取り入れることが出来たら良いと思う。

空から日本の上空をみると、森と都市部、海とが一体化してとても美しい。森林管理士として一歩を踏み出すために、自分が管理、携わっている森に、もっと関わり、どのような地域の問題、どのような改善方法があるか、地域のかた方との交わり、少しでも森を維持できるサポートをして行きたい。

森だけでなく、地球の変化、温暖化にも考えて行動して行きたい。22世紀が森林、環境が悪化していないで、住み安いことに全員が願望している。

森との対話、変化に敏感で対応できるように自らの知識をもっと入れて、取り組んで行きたい。地球温暖化により、今の生物が絶滅しないように、政策の動きや取り組み、実態を見ながら森と接して行きたい。また、若い人達が「森で働きたい」と関心が持てるように行動して行きたい。

森林管理士として、これから自分が出来ること事から、仕事ととしても関わる、何でもアプローチ出来るようにして行きたい。日本の森林も森林の事を幅広く管理者は、とても環境に対して、これらに対しても、重大、重要と思う。近くから遠くへ、そして次の世代へ、森林管理士として森を守って行く。

M . K さん (福岡県) : 国・公・私有林に共通する課題

高度経済成長を迎え、木材需要が増加し、成長量の2～3倍の伐採が行われた。当時、まだ外材輸入の整備が行われておらず、国有林の伐採が続き、ついには無くなってしまった。環境庁が発足

と森林の公益的機能を重視する世論とが重なり、伐採が行われなくなった。国有林は 1970 年代になると慢性的赤字に陥る。こうした無策とも思える国の策が、現在の森林・林業問題の発生に繋がる。簡素な政府を目的に森林管理署(営林署)を統廃合し、職員を減らし、地域の雇用も低下させる。重要な森林技術を持った技能者も少なくなり、林業を衰退に追いやってしまう。

全て国の政策が悪いとは思いませんが、外材の需要拡大や様々な局面で、もう少し別の行動をとれなかったか?と疑問が残る。森林管理署の人員削減が、今日の山林の荒廃を手助けしているように思えてならない。

高齢化、後継者も居なくなり大変な問題だと思います。この対策は、私も笠原先生と一緒に、国が買い上げ管理するのが重要だと思います。付け加えると、国と森林管理経営力に優れた一般企業も買い上げに参加したいと思います。開発やり取りト化が目的ではなく、あくまで、森林の多面的機能を活用した管理経営です。

私共の親会社である九州電力(株)の社有林管理のノウハウを生かしたいと思う。荒廃した森林にセラピ-基地を作り、九電のメンタルヘルス研修とセットで行う事です。大分県の山下池に作り九州の拠点としたいと考えている森林の多様性を把握した森林管理として積極的に行動したいと思う。

しかし、健全な森林施業でも、本来の木材生産にも力を入れるべきだと思う。路網を整備し、高性能重機を入れて生産力を上げるようにしたいし、また社会に森林・林業の無限大の可能性を伝えて行きたい。

H . O さん (宮城県) : 国・公・私有林に共通する課題

時代背景：戦後復興に当たり、多くの木材需要が生じたが、戦前・戦中の乱伐で供給量が十分でなかったことから、短期間でこの体制を整えなければならなかった。そのため、比較的短期間で生育するスギを中心とする針葉樹を人工造林により植栽する拡大造林政策が取られることとなった。また、国産材のみで需要に十分応えられないことから、安く大量に安定的に調達できる外材の輸入も合わせ行われた。

利点：国の方針として国有林における拡大造林対策がとられた事により、復興に應えるための体制が、伐採搬出～加工の流通面に至るまで比較的短期間に整えられた。また、需給関係から材価も安定して順調に伸び(1980年まで)、これら収益を山元に還元することが出来た。

問題点：針葉樹を中心に植樹し続けたことから、その後アカマツ等の広葉樹のニ-ズが多くなった際、弾力的柔軟に対応することが出来なかった。また、その後の需要変化にも拘わらず、拡大造林政策を変えなかったことから(1996年まで)、これが材価の低下に一層の拍車をかけることとなった。

一方、この状況下、国有林の赤字も累積することとなり、これらに対し、政府は一般会計からの繰り入れにより補填し続けたことから、その分、私有林・公有林への手当が疎かになる状況を招来した。

これら国の硬直的政策から山元においても、従来型営林法からの改善が図られることは少ないまま、材価の低迷 就労人口の減少 林業の不振 営林意欲の更なる減退、と言う負の循環からなかなか脱却できず、今日の状況を迎えている。

長期間にわたるこれらの低迷により、外材とは価格面で大きく水を開けられ状況になっており、抜本的改革のためには、加工流通面のシステム等、あらゆる面でメスを入れ、効率的な体制を構築することが急がれている。

しかし、この間、林業者各位の被った失望感、諦観は少なからず、問題は根深いところにあると思われる。この点を何ら鑑みることなく「林業再生プラン」を進めた場合、かつての拡大造林政策と同じ轍を踏むこととなることを切に危惧するものである。

R . T さん (栃木県) : 国・公・私有林に共通する課題

地球温暖化が、世界的な問題となり、CO2削減が京都議定書でも交わされ6%の数値目標があり、3.8%が森林で賄われることとされている。日本は森林国であり、森林の持つ多面的機能性の推進を図る事が大切である。

森林管理士としては、森林の多面的機能性を活用すべきで、地球温暖化防止を図る。CO2削減のためのカーボンオフセットの炭素の貯蔵量を計測する事がある。農山村の里山を整備し活用を図る事。山林の持つ多面的機能性や環境教育を実施する事。山林の持つ医学的なメディカル効果を推進する山林の整備を行う。国民の健康に寄与できるような森づくりを、所有者、関係団体と調整をする。また、荒廃した里山は、放置されており、森林ボランティアとして、指導的な立場になり整備して行く。

今後、地球環境の問題と国内では高齢化が社会問題となる中において、CO2削減は、国民的な期待も大きい事から、温暖化の為にエネルギー排出による温暖化ガスや炭素の貯蔵量の計測やモニタリングを実践する事が注目され、その期待に応えられる働きをする事が使命である。

また、森林セラピーとして予防的なメディカル効果が山林にある事から、セラピーの森を増やし、国民が予防医学の立場から健康的な生活を送れるよう森林を再生し、国民が森に目を向けられる整備して行くことも使命である。

【 2009年度 】

K . S さん（秋田県）： 山間地域私有林業の現状と地域振興策

地域における私有林は、長期間に及ぶ木材需要の停滞、価格の低迷、そして後継者不在等により、森林所有者の経営意欲、投資意欲は減退し、森林の手入れを放置してしまうということに加え、森林そのものを手放してしまうという事例も見られるようになりました。

農業を含め、地域を支える経済基盤が根底から崩壊してしまうような状況にあり、「限界集落」と言う現象は、まさしくその象徴であります。このまま推移すると、集落は消滅し、農地や森林は荒廃してしまいます。

1780年代の天明の大飢きん、1830年代の天保の大飢きんを乗り越えてきた「村」が、飽食の時代といわれるこの時代に消えてしまう……。そんな危機感があります。

では、活力ある山村振興のために何が求められているのか、今生きる者はどういう取り組みをしなければならないのか。森林・林業という面から模索してみたいと思います。

第一点は、森林組合等が主体となって森林・林業・木材産業等地域における地場産業総合システムを構築し、若者の雇用創出する必要があります。森林整備、林産販売、木材加工販売さらには特用林産物、森林レクリエーション等多様な展開が必要ですし、地域行政、住民のバックアップを確保しなければなりません。地域における産業は、地域の人達の知恵で、努力で結集したとき、はじめて地域に定着するように思います。

第二点は、働く若者達には、林業を担うフォレストとして、高性能林業機械等を柔軟に乗りこなすオペレーターとして、そして森林、林業全体についてのトータルコーディネーターとして誇りをもって取り組んでもらうことが肝要です。いかに森を守り育てることが大事か、樹木等とかわりあいながらの山村での生活がいかに健康的、人間的なのかを説いて、実感してもらうことによって、ステイタスは生まれるものだと思信しています。

第三点は、このような取り組みを農業等と連携していけるような体制を構築できれば、山村再生、山村振興はより現実のものとなります。

地域のスギ等人工林が成熟の度を増しており、地球温暖化防止対策で森林の公益的機能の発揮が求められている今こそ「チャンス」だと思います。

K . S さん（岩手県）： 山間地域私有林業の現状と地域振興策

私は、いわゆる都市部の出身であるが、山間地域にイタ-ンし、森林組合に林業作業員として就職した。林業の現場では、やはり高齢化が進んでおり、林業作業員は 60 歳を超えている人もかなりの率でいる。しかし、人数がどんどん減っているわけではなく、私のような者や 20 代、30 代の若者が、ここ数年で何人も就職している。作業路も年々その延長を伸ばしているし、ハ-ベスタ等の機械も導入している。

国有林がほとんど無い町なので、国からの公共事業はなく、公共事業は県事業が地元の間伐材と作業員の機動力を生かした防風壁の設置(間伐材の杭を人力で打ち込み、数百メートル設置し、新設した保安林の苗木を保護するためのもの)を競争入札で落札するなどしており、必ずしも経営を公共事業だけに頼っているとは言えないと思うが、それでも何とか経常利益は黒字である。

しかし、作業員の給与は都市部の一般的な給与と比較してかなりの格差があり、山間地域の林業を発達させるためには、さらに工夫が必要と考える。

森林組合が取り組んでいる一つの大きな商品に炭がある。ナラ林が多くあるため、炭焼き小屋を作り、里山の活用を図っている。このことにより、高齢者を中心にした新たな雇用が生まれ、今までしいたけのほだ木にならず捨てていた材の有効利用が図られた。炭は都市部の大手焼鳥店と大口の流通がなされており、炭焼き小屋での焼き鳥実演会を開くなど、生産者と消費者との間で「顔が見える」取引をすることで信頼性を得られ、他との差別化を図っている。

また、町ではカラマツを多く植栽しているが、森林認証を受けた森から、やはり認証を受けた町内の集成材工場で集成材を製品化し、カラマツ自体を商品登録するなどして、やはり差別化を図り、都市部の建築メ-カ-と取引(町ぐるみで PR のために、年 1 回はメ-カ-を訪れ、イベントを開催)して、独自の流通販路を開発している。

また、森林体験を無料で実施し、広く森のことや町を知ってもらうような試みもしている。

林業の現状はあいかわらず厳しいのは事実であるが、雇用の確保、都市との交流、材のブランド化、顔の見える取引等々によって、林業振興・地域振興のために挑戦的に望んでいるところである。

A . S さん (栃木県) : 国有林の現状と改革方向

日本の 7 割は森林でそのうち 31%は国有林である。私は学生の頃、国有林という言葉に安心を抱いていた。美しく管理された森林、国民の福祉に寄与し、経済的機能を果たし、国全体も繁栄していく、そんなイメージを抱いていたのである。

しかし、現実はどうであろうか。1970 年代の後半から 30 年以上赤字続きで、職員の数も 10 分の 1 に減らされ、地元の人間の雇用も減り、過疎化へと拍車がかかった。国有林は国民の税金により管理運営され健全な森林として機能を果たすはずなのに・・・。これまでの管理、運営が適切でなかった事が明白なものとなり、表面に表れている。

今年、政権は自民党から民主党に代わった。『INDEX2009』の中で、今後、木材の流通体制のあり方を見直し、木材の自給率を 50%、100 万人の雇用が掲げられた。また、京都議定書では鳩山由起夫総理が 1990 年比で 25%の CO2 削減と述べており、私はこの新聞記事を読んだ時、胸が高まった。しかし、実現は難しい。なぜなら、これまで長くとられてきた古い管理体制を黙認しようとする地方議員も多くいると思えるからだ。しかし、地球温暖化は一時も速い解決を迫られており、そのためにも国有林のあり方を大きく変えなければならない。

党の違いに関係なく、全ての人が力を合わせて実現して行かなければならない課題である。

私も「森づくり」関連の知識を深め、自分の出来得るところから始めていきたい。技術の習得も。そして多くの人々が意識を改革し、国有林のあり方を見直すことが出来るよう働きかけていきたい。

環境保護より産業優先を掲げたある経済大国は現在 CO2 排出国第一位になっている。バランスのとれた政策を打ち出さなければ、そのツケは必ず返ってくる。その意味でも民主党の政策を見守っていききたい。そしてその政策に希望と期待と確信を持ちたいものである。

S . M さん (栃木県) : 国有林の現状と改革方向

国有林について思うことは、くにで管理している国民のものの森林という意識が日本では少ないと思う。山村に住んでいる森林所有者は自分の森林は自分で守ると言った感じで良く手入れされている森林が多い。しかし、国有林は国民の財産だということを意識している人は少ないと思う。国有林を見ると、まだまだ手の入っていない人工林が多く、徐伐、間伐のされていない、真っ暗闇で、下草もなく、細々とし、さらには曲がりに曲がった木ばかりの森林も珍しくはない。これを見ていると、国有林を管理している林野庁は現状を知っているのかの疑問が残る。

国有林がこんな危機的状況なのに対し、予算が減っているし、人員もカットされている。時代が不景気ということもあって、それは仕方のないことだとは思いますが、今の状況を見ると、今までの国有林事業のあり方が間違っていたと思う。

これから国有林は、国民の森林という事を広く国民に意識付け、森林整備を進めて欲しいと思う。その為には国有林が事業としてだけ考えるのではなく、環境の面からも考えていくことが大切だと思う。森林の公益的機能ということで具体的な数値を、誰もが分かり易い様に提示する

T . T さん（茨城県）： 野生鳥獣被害拡大の背景と対応策

現代の日本の森林は、戦後の拡大造林にともなう人工林が、木材の貿易自由化により徐々に活力を失い、森林の管理も疎かになっていった。それは、森林組合などの意欲や、個人の関心も奪い、健全な森林の在り方からも、かけ離れていきました。

人が入らなくなった森林は、バランスを失い荒れていきます。それは山の生態系のバランスも乱して、太陽光が入らないような森になり、地表の土は荒れ、地中の水分量にも変化が表れ始めた。保水力を失い、弱くなってゆく地表は、土砂崩れや雨に荒らされた土砂が川を下り、流域の河川の水質悪化や、淡水の生物多様性もおかしくなる原因になります。

山の中での動植物の生物多様性にも当然変化は起きて、種が減り、植物が咲かない、餌となる小動物も減って行くと、小動物や植物を今までは苦労せずにとれていた、シカやイノシシ、サル等が餌を求めて人間の生活圏内にも姿を現し始めてきます。

それに伴い、山間部の農作物だけには留まらず、木や植物の種子や新芽も減り続けて、益々生態系にも変化を及ぼします。あたり前に生活空間を分けていた動物と人間の接触が増えて、時には死につながる事故も度々起こるようになりました。イノシシは里山の作物を採りに、山を降りて人間とぶつかったり、時にはケガでは済まないこともあります。

シカも植物の芽を食べて、山の地表は荒れています。サルも人間との事故が多数あって、作物の被害やケガを伴う事故を起こします。

増え過ぎた野生動物を減らす為にも、森林組合や猟友会などのボランティアなどの継続的な狩猟が必要です。それに伴い、入らなくなった山への関心を背負い、もう一度考え、システムを確立し、生態系の回復を取り戻さなければいけない。国や自治体だけでなく個人レベルでも、森林の生物多様性の回復を目指したい。

T . T さん（栃木県）： 野生鳥獣被害拡大の背景と対応策

イノシシを、自分の生活している周りで良く見かける。家の庭まで入ってきて、荒らしていくのは、もう珍しいことではない。少しだけ食べていくのならばまだましで、数頭で群をなして来るので、サツマイモとかは、全部食べていき、畑をぐしゃぐしゃにして帰って行ってしまふ。

なぜイノシシがこんなにそば(傍)まで出てくるようになったか。祖父、祖母に、昔からこんなに良く見かけたのかを聞くと、誰も、イノシシが居たのは居たが。家の傍までは来なかったと言う。イノシシは一体どこに居たのか。それは山の中に居たということになる。でも、今日、なぜ山の中で生活しないのか。生活しないのではなく、生活できなくなったからである。

イノシシだってわざわざ人が居る所にまで下りて来たくないと思っているに違いない。山に食べ物が無いから下りてくる。山に食べ物が無い理由は、されていることがされなくなったこと、つま

り、山の落ち葉拾いや、薪にする為に枯れ枝を集めなくなった為、人が山に入らなくなってしまったことが一番の理由だと思う。人が山に入れば、きれいになり、そこに山の食べ物が自然と出てくる。それをイノシシが食べる。

そのような山にするには、環境税を利用して、どんどん山をきれいにしていくべきである。1人では出来ない事なので、地域の住民や市町村、森林組合などに協力してもらって進めていくべきだと思う。動物との共存は、可能だと思う。

以 上